

第4講：93 「八町四方」

おやさと研究所講師
澤井 真 Makoto Sawai

今回取り上げる逸話「八町四方」について、「四方」を天理教の空間論から、そして「八町」を教祖の教えの具現化としてのおやさとかた構想から、紐解くことにしたい。

この逸話が語られた時期については明らかではない。しかしながら、教祖が中南の門屋の南向きの窓から外の景色を眺めながら語られた逸話であるという点で、中南の門屋が建てられた明治8年以降から、御休息所に移られる明治16年11月25日までの逸話だと推測される。また、中南の門屋は、西側10畳と、窓のない倉づくりの東側10畳から成っているため、西側10畳での逸話だと理解することができよう。

「四方」—天理教の空間論—

教祖の逸話をはじめ、教祖によって用いられてきた長さの単位は、1尺（約30cm）、1間（約1.8m）、1町（約109m）など、明治18年（1885年）に、日本がメートル条約に加入するまでに、使用されてきた度量衡の単位である。かんろだいが据えられたぢばを囲む1坪は、天理教における空間の最小単位である。1坪とは、「一間四方」、すなわち1間×1間を指す。このことは、天理教最初の普請建築である「つとめ場所」が建てられる際の、「一坪四方のもの建てるのやで。一坪四方のもの建家ではない」という教祖の言葉が、ぢばを中心とした現在の天理教建築の基盤となっている。

天理教の空間論、すなわち天理教の教理にもとづく場所や方向に関する見方については、「四方」と「八方」という2つの方位認識が、主に用いられている。日本では、「四方位」、「八方位」、「十二方位」などの方位が伝統的に用いられてきた。「四方」とは、北・南・東・西という4方位で全方位を指す仕方である一方、「八方」とは、「元初まりの話」において、親神天理王命が道具雛型を引き寄せられた際に登場する8方位で全方位を指す仕方である。

このように、360度の全方位をどのように把握するかという点に関して、天理教の空間論では、4方位と8方位が用いられている。天理教における建築は、「おさしづ」の「一間四方」（明治21年7月24日）から成るぢばを中心としている。その空間把握は、東西南北の4方位を基本とし、その延長線上に建てられていく建築物は、四方面の東西南北の礼拝場や、おやさとかた建築のように、ぢばを中心とし、四方へのひろがり意識して建築されていくことになった。

天理教では、「おさしづ」において、「四方四面鏡やしき」（明治24年1月30日）と教えられるように、ぢばを中心とした四方すべてが正面となる。すなわち、ぢばに鎮まる親神に向かう方位においては、どの方位であっても正面、すなわち四方面だと理解される。

四方四面鏡やしきの中に、一つ見るも、そのまゝ深きの理程聞いたる。（明治24年1月30日）

ぢばという中心軸に基づく天理教の空間論では、あらゆる事柄が、鏡のように映ることになる。言い換えるならば、人々はぢばに正面に向き合うと同時に、ぢばを囲む人々と互いに向き合うことになるのである。したがって、ぢばを囲んで親神に向き合うとき、映し出されるあらゆる事柄に対しても向き合う必要がある。

「八町」—教祖の教えの体現としての「おやさとかた」—

天理教の立教以降、年限が経つにしたがって、ぢばを中心としたおやさとは、当時のおやしきから八町という空間的に大きく広がり、そして教えは世界へと広がっている。「おさしづ」では、以下のように「八町四方」が述べられている。

小さい事思てはならん。年限だん〜重なれば、八町四方に成る事分からん。（明治27年11月17日）

昭和28（1953）年4月18日、教祖70年祭の具体的な構想が発表され、そのなかで「復元の実」、すなわち陽気ぐらしを進めていくうえで、「おやさとかた構想」が中山正善2代真柱によって打ち出された。そのなかで、「親里」という言葉がもつ意味として、①ぢば、②子供の帰ってくる場所、③子供に喜びを与えるところ、という三つが示された。そのうえで、「おやさとかた」とは、ぢばを囲む人々が、いちれつきょうだいであることを実地に表していく場所を象徴する建築物であることが示された。したがって、「おやさとかた」の意義は、陽気ぐらしの姿をぢばに映し、人々がたすけあう平和な世界、すなわち神人和楽の陽気ぐらし世界を、おやさとかたから構築することにある。⁽¹⁾

おやさとかたの普請に際しては、おやさとかたふしん青年会ひのきしん隊が発足し、昭和29年1月9日、中山善衛3代青年会会長（当時）が、第1回隊の隊長となって発足した。「やかた完成の日まで」、青年会のひのきしん隊活動は続けられており、毎月多くの青年会員が、ぢばへの伏せ込みを続けている。

その結果、大和地方の一農村に過ぎなかった庄屋敷村は、おやさとかたの整備とともに大きく広がることになった。「こころ辺り一面に、家が建て詰むのやで。奈良、初瀬七里の間は家が建て続き、一里四方は宿屋で詰まる程に」という逸話の通り、近隣はもとより遠く海外からも、信者たちが教祖を慕って、おぢばに帰り集っている。そして、おぢばに滞在する帰参者たちのための宿泊所である詰所も備えられることになった。

そのため、中山家の住み込み第一号の青年の2人であった高井猶吉（明治12年入信）と宮森与三郎（明治10年入信）は、昭和9年に落成した教祖殿の外廻りの濡れ縁で、「ほんまやったなあ、ほんまやったなあ」と抱き合っ泣いていたと伝えられる。彼らは、「いづれここに大きな館が出来て、大勢の人が、ありがたい、結構や、と言うて来るようになるのやで」という言葉を、間近で接した2人であった。⁽²⁾ 教祖の言葉通り、変わりゆくおぢばの風景に驚きながら、先人たちは自らの信仰をより堅いものにしていったと思われる。

道が伸び栄え、おやさとかたが現在の姿になるためには、教祖にお喜びいただきたいと懸命に道を通ってきた先人の努力の姿があった。先人たちは、「世界いちれつをたすけたい」と扉を開いて現身を隠された教祖を慕っておぢばに帰り、おやさとかたを陽気ぐらしの雛形とするように尽くしてきた。現在、われわれが目にするおぢばは、教祖の言葉とともに、先人たちの努力を通して築き上げられてきた、おやさとかたの風景なのである。

[註]

- (1) 中山正善「御誕生祭終了後会議所に於けるお話」、『真柱訓話集』第15巻、1953年、341頁。
- (2) 高井猶吉編『教祖より聞きし話・高井猶吉』、天理教道友社、1984年、250頁。